

アクペクトと空間出入動詞

小 泉 保

1. 永遠の時間の流れの中で、ある期間われわれはこの地球という惑星に生まれいで、生活し、やがて死んでいく。誕生・生存・死去という人生のリズムは、まさに生命体のアクペクトである。

これに対応した形で L. Tesnière は文法的アクペクトを次の基本的な 4 つのタイプに分けている。

- (a) • 瞬間相 (momentané)
- (b) • — 起動相 (inchoatif)
- (c) — 継続相 (duratif)
- (d) — • 終結相 (terminatif)

こうしたアスペクトは、言語により、さまざまな文法的手段によって表されるが、日本語について言えば、アスペクト表示には迂言的方式と複合的方式とがある。

(1) 迂言的方式

動詞のテ形に補助動詞を組み合わせ、次のような形式をとる。

- (a) カイテ イル (行為の継続、結果の持続)
- (b) カイテ アル (行為による結果の状態)
- (c) カイテ シマウ (行為の完了)
- (d) カイテ オク (準備的行為)

(2) 複合的方式

複合動詞の形式でアスペクトが表示される。

- (a) カキ・ハジメル (起動相)
- (b) カキ・ツヅケル (継続相)
- (c) カキ・オワル (終結相)

小論は、こうした形式をとる各アスペクトの用法を論ずるのではなく、アスペクト的補助動詞とアスペクト的複合動詞を意味的局面から考察することを目標としている。

2. アスペクト的補助動詞

(1)の(a)イル、(b)アルのような存在動詞が動作の継続や結果の状態を表すことは、英

語の進行形 John is reading. 「ジョンが読んでいる」のbe動詞やドイツ語の完了形 Ich bin erkrankt. 「私は病気である」の sein 動詞の使用に見受けられるところである。

だが、(1)(c)の完了を表す「シマウ」についてはあまり論及されていないようである。

「シマウ」の語源はともかくも、この補助動詞の意味は、「入れ納める」「置くべき場所へかたづける」という動詞としての原義から派生したものと思える。すなわち、ある限定された空間に入れること、格納の行為に基づくものであろう。英語ならば、to put in と訳されよう。

(1)(d)の「オク」は「事物をある位置にすえる」を本義としている。英語では動詞 to put に相当する。鈴木重幸は「もくろみ」をその意味特徴としているが、確かに、「ヨンデオク」「タベテオク」のように、ある計画的準備行為が含まれている。これは行為の設定という見方によるのではないかと思う。すなわち、ある状況においてある動作を行うということで、ここにその状況に対処するための行為という意味合が出てくることになる。

1) 窓ガ アケテ アル。

2) 窓ヲ アケテ オク。

「テアル」形は、アケルという行為を前提とする結果を表しているが、「テオク」形の方は、ある事柄を予想してのアケル行為、ある結果を作り出すためのアケル行為を意味している。

要するに、「テアル」形と「テオク」形は、「ある行為とその結果」という結果相の出来事 ・ ― を異なる角度から眺めているのみである。

テアル：「窓の開放」という結果 ― を通して、アケル行為・を推定するもので、結果に焦点がある。(行為者不明)

テオク：「窓の開放」という結果 ― を予想して、アケル行為・を行うもので、行為に焦点がある。(特定の行為者)

口語体や方言では、迂言的表現が次のように融合短縮することが多い。

カイトイル →カイトル (―)

カイトシマウ→カイトチャウ (― ・)

カイトオク →カイトク (・ ―)

これは、3つの短縮形が互いにアスペクトとして対立関係にあることを示している。

3. アスペクト的複合動詞

(2)(a)カキ・ハジメル (to begin to write) はカキ・ダスとも言える。

このダスについて考えてみたい。他動詞ダスは自動詞デルとペアを組むが、共に内部から外部への外出行為である。

デル：行為の主体が内部から外部へ外出する行為。

ダス：行為の主体が対象物を内部から外部へ外出させる行為。

これらを図示すれば、次のようになる。

デル | 0→ ダス | → 0

縦線 | は内部と外部との境界線を指し、0→では行為主体が移動することを、 → 0ではある対象物を移動させることを表している。

ハシリデルは行為主体があるものの内部から外部へ走って移動することを意味するが、ハシリダスは走る行為を開始する起動相の表現となる。英語ならば、デルの to go out に対して、ダスは to make one go out と使役形で表されよう。

また、デル：ダスの逆にあたるコム：コメルでは、ハシリコムにおいて、行為主体が外部からあるものの内部へ走って内入移動することであって、こうした内入行為が go in は他動詞コメルと自他の対をなしている。

ハナシコムでは、やはり「話す状態に内入する」始動の意味をもつことができる。

日本語では、起動相ハナシハジメルよりもハナシダスの方が多く用いられている。すなわち、ある行為の開始を、ダスのように、ある行為の外出移動、もしくは、コムのように、ある行為の内入移動としてとらえていることになる。

(2)(b)カキツツケル (to continue to write) のツツケルについては、とくに注釈を必要としないが、英語では、to go on 「行きつづける」の副詞 on が継続を示すことに、E.C.Traugott は注目している。

また、前置詞 in にも同じような働きがある。日本語では、「営業中」という店の前に掲げる札の「中」がこれに相当するが、これは漢語的用法である。和語の「読んでいるところだ」という言い方のトコロであるが、普通は「場所」の意味にとられがちであるが、内実は「地点」を意味していると思える。おそらく英語の前置詞 at に置き換えられよう。このように、on, in, at のような空間のある位置を指定する要素が行為の継続を表すことも Traugott の指摘している通りである。

(2)(c)のカキオワル (to finish writing) のオワルについても何らコメントはいらない。だが、カキオサメルという終結相表現に出てくるオサメルは補助動詞「シマウ」と同様、格納行為を意味している。

すでに、Traugott は英語の上昇副詞 up が完了に利用されることを認めている。例：eat up 「食べおわる」。日本語でも「カキ・アゲル」のように、「アゲル」という上

昇動詞により完了が表される。また、「トキ・オヨブ」の「オヨブ」のような到達動詞も延長始動行為を示すのに使われている。

4. その他の補助動詞と複合動詞

日本語では、「イク」「クル」が継続相の表現に用いられることは周知の事柄であるが、こうした往来動詞には次のような区別がある。

ある時点までの継続：ヨンデ クル

ある時点からの継続：ヨンデ イク

英語でも、to go on reading「読みつづける」という言い方に往来動詞の go が現れる。

別に、「ナガラ」という副助詞を使ったヨミナガラという継続表現がある。「ナガラ」は語源的に、格助詞ナが体言のカラに付加されたものとされているが、カラは離去 (from) の格助詞に進展している。従って、離去が継続相に使用される珍しいケースである。

英語の離去の副詞 off は完了終結を表すことが多い。例：to drink off、「飲みつくす」。ドイツ語ならば、austrinken「同」で、終結完了を aus- の部分が伝えている。さらに、auftrinken「飲みほす」では、上昇の前綴り auf- が付けられている。これと関連して、英語では、to burn down「焼きつくす」のように下降の副詞 down が終結に係わっている。日本語の「ツクス」は「残らず出して、その限界まで達する」の原義から、「ヨミツクス」のように、ある分量の完全な消失を含意した終結相に転義している。

また、通過の「トオル」に対する他動詞「トオス」は、「端から端までとどくようにする」という意味から、「ヨミ・トオス」のように、継続相を含みとしている。これに対し、英語ならば、副詞の through、ドイツ語ならば、副詞 durch が利用される。

英語：to read through、ドイツ語 durch-lesen「通読する」

5. まとめ

「シマウ」「ダス」「コム」「オサメル」のような補助動詞や複合動詞を一括して「空間出入動詞」と呼ぶことにすれば、「イル」「アル」「オク」のような存在動詞がアスペクトの継続相を担当するのに対し、空間出入動詞が始動相や終結相を受け持っていることになる。

英語では、始動・継続・終結の各相を to begin, to continue, to finish のような動詞で表すと共に、空間や方向の副詞で表示する方法も用いられる。ドイツ語でも類似し

た傾向が見られる。ここに、英語とドイツ語における相の副詞と日本語の空間出入動詞との対応表を掲げておく。

(英語・ドイツ語)			(日本語)
起動相：－	an		ダス (外出行為)
	in	ein (内入動副)	コム (内入行為)
継続相：on	－	(位置副詞)	ツツケル (継続行為)
	through	durch (通過副詞)	トオス (通過行為)
終結相：off	aus	(離去副詞)	シマウ (格納行為)
	down	ab (下降副詞)	
完了相：up	auf	(上昇副詞)	アゲル (上昇行為)

ドイツ語の始動動詞 anfangen 「始める」には前綴り an-が付加されているが、終結には前綴り ab-が対応する。

an-spielen 「演奏し始める」：ab-spielen 「演奏し終える」

アスペクトを存在動詞や空間移動動詞で表示する方式には、末位述語言語のカザフ語、ウイグル語、モンゴル語、朝鮮語などにも見られる一般的傾向である。将来こうした言語との間でのアスペクト表現における比較対照研究が期待されるであろう。

参考書：Tesnière, L (1959) :Éléments de syntaxe structurale. Paris.

Traugott, E.C. (1978) :Spatio-Temporal Relation, J.H Greenberg,

C.A.Ferguson and E.A.Moravcsik (eds.) Universals of Human Language

3.Word Structure. Stanford.

小泉 保 (1990) :『言外の言語学』三省堂

鈴木重幸 (1972) :『日本語文法・形態論』むぎ書房

(こいずみ たもつ・関西外語大学教授)